

II 明治期韓国で活躍した外交官・若松兎三郎の生涯 (I)

永野慎一郎 (Ph.D)

アジア近代化研究所理事・大東文化大学名誉教授

同志社で「自由」「良心」「人類愛」を学ぶ

若松兎三郎は明治2年(1869年)1月17日、大分県玖珠郡森村で生まれた。森村で小学校を卒業し、私塾で漢学を学んでから、漢学の先生で、敬愛する園田恒四郎が京都の盈科義塾に招聘されると、園田先生を追っかけて京都に行った。

同志社普通学校に進学し、寄宿舎生活をしながら設立者の新島襄の教育理念である「自由」「良心」「人類愛」などを学び、当時としては数少ない欧米帰りの先生たちから進取の精神や西洋の価値観などを感じた。同志社には国際色豊かな教師が数多くいた。新島襄をはじめ、政治学者の浮田和民や安部磯雄、思想家の徳富蘇峰、アメリカ人教師 C.M. ケーデーなどに多くの感化を受けた。

若松は同志社に入学してから2年目に洗礼を受け、キリスト教の信仰を深め、宣教師たちとの交流を通じて、広い世界には数多くの民族、言語、文化があり、多様な価値観が存在していることを理解した。

武家出身の若松家は裕福な家庭ではなかった。京都政財界の巨頭、田中源太郎が親代わりとして学資や生活費などをすべて負担してくれた。また、東京大学法学部への進学を勧めてくれたのも田中源太郎であった。若松は神様が施して下さった恩恵であると信じ、「地の塩」「世の光」になろうと決心した。

東大法学部在学中に外交官試験合格

若松は同志社で培った国際的な感覚と語学力を活かして国際舞台で活躍することが夢であった。東京帝国大学法学部に進学してひたすら勉学に励んだ。

若松は、1896年2月に実施された文官高等試験外交科(外交官及び領事館試験)に東京帝大法学部在学中に首席で合格した。合格者は二人。同年9月試験には4人合格したが、その中に東京帝大法学部を1年前に卒業した幣原喜重郎がいた。幣原は外務大臣、総理大臣、衆議院議長を歴任した大物政治家である。

若松は大学を中退し、同年3月、京城公使館補に任命され、外交官としての第一歩を踏み出した。幣原は9月に仁川領事館補に赴任した。若松が一足先に任官したため外交官としては先輩である。

若松は横浜港から乗船して瀬戸内海、玄界灘を渡って仁川港に到着した。日本と変わらない沿路の朝鮮の山野を見ると、なんとなく親近感があった。山や川を眺めながら、九州大分県の田舎で見た風景を思い出した。初めての海外への旅であった。

京城公使館で大物外交官に会う

若松が赴任した京城公使館には小村寿太郎が公使として着任していた。小村寿太郎は主要国公使（当時は大使職はなかった）を歴任し、二度外務大臣を務めた大物外交官である。小村公使の帰国後は原敬公使が赴任した。若松は経験豊かな二人の公使の下で外交官としての基礎知識を学んだ。公使館の担当業務は領事裁判および行政事務であった。

小村公使は外交官新米の若松を暖かく接してくれた。外交官としての心構えや礼儀作法などを教授してくれた。酒席に誘われることもあった。妓生（キセン）を傍において小村は若松に向かって「男は羽を伸ばすことも必要だよ」と忠告すると、若松はにやにやしているだけであったが、悪い気はしなかった。それにしても朝鮮の妓生は教養があり品格がある。その上に美しいのだから、男心を揺さぶるところがあった。いわゆる社会人勉強の瞬間であった。清酒正宗、マッコリ、焼酎で杯を交わしながら、世相を語り、世界情勢や日本が置かれている立場などについて持論を聞かされた。さすがに小村公使は体躯の小さい割には雅量が大きい。二人は同じ九州人であることから親近感があった。

若松兎三郎が外交官初年生として小村寿太郎と出会い、交流した期間は3か月足らずであったが、外交官の大先輩から外交官としての哲学を教えられた。

小村公使の後任として赴任した原敬は岩手県盛岡市出身で明治・大正期の大政治家である。原敬は京城駐在公使を最後に退官し、大阪毎日新聞社長となった。その後、立憲政友会創立に参画し、衆議院議員に当選して逓信大臣、内務大臣を歴任した後、1918年に米騒動によって寺内正毅内閣が倒れると政党政治家として最初の政党内閣を組閣し、平民宰相として世論の支持を受けた大政治家である。

若松は1年足らずの京城公使館勤務中に二人の大物外交官と出会い、新米外交官としては珍しく経験豊かな外交官先輩たちと交流するなかで外交官としての礼儀作法や政治哲学などを教授され、太い人脈をつくることができた。これらの人脈がのちの彼の外交官活動に大いに役立った。

京城公使館には同郷の友人である加藤本四郎が6个月前に着任していた。加藤は大分県森村出身で同じ時期に東大法学部で学んだ学友であり、共に外交官をめざして励まし合った仲間である。二人は公使館で机を並べて勤務しながら夜になると京城の街に出かけて焼酎で杯を交わしながら将来の夢を語り合った。

京城の生活に慣れ始めた頃、ニューヨーク領事館へ転勤となった。1年足らずの京城勤務で吸収した朝鮮の伝統文化をさらに深めるために再渡航を夢見ながら京城を後にした。

米国と中国で多様な価値観を体得する

若松兎三郎は2年7か月間、ニューヨーク領事館に勤務し、自由奔放なアメリカ社

会を肌で感じとった。言語や民族の違いを超越して、多様な価値観を認め合いながら共生への道を模索している市民社会を観察し、ダイナミックに変容している世界情勢を察知した。

ニューヨークは多くの政府要人が立ち寄るところであった。有栖川宮威人親王、伊藤博文、近衛篤磨、加藤高明などが訪問し、世話する機会があった。多くの著名人に接する中で外交官としての見識を高めるなど、充実し最も成熟した時期であった。

次の勤務先は清国杭州領事館であった。明治天皇の信任状を携えての領事赴任であった。領事は大使やその他の外交官に準じた特権免除、すなわち領事特権が認められた責務である。領事昇格は責任を伴うが、外交官としてのステータスである。やりがいのある職務でもある。杭州領事館では義和団事件などで活躍の場が少なかった。

杭州領事館から本省勤務を経て、1901年3月から清国沙市領事に命ぜられた。二度目の清国勤務であった。広大で未知の中国社会を観る機会であった。

産業化が急速に進行し、繁栄の最中にあった米国社会と封建社会から近代社会への移行期の中国社会で外交官として働きながら多くのことを学び、知識を吸収した。

5年間、米国と中国という両巨大国で多様な価値観と見識を身につけることで、外交官として一層の貫録がついた。

韓国・木浦との因縁の始まり

1902年5月、韓国木浦駐在領事館領事に命ぜられた。東京に帰り、帰国中の夫人と1歳の長女を連れて新任地木浦に向かった。韓国の土を踏むのは二度目であったが、韓国の山野は変わらなかった。懐かしい思いが胸一杯で感無量であった。京城公使館勤務の時と違って、日本国領事としての責任ある地位である。日本国を代表する領事として日本の国益は最優先だ。同時に相手国にとっても利益になるようなことがないと交渉は成功しない。これが本来の外交官の仕事である。若松は日本と韓国の両方にとって利益となることは何だろう、と考えながら現地入りした。

木浦は朝鮮半島西南端に位置し、多島海の島嶼地域と陸地地域を連結する関門であり、福岡、長崎、大阪など日本の港と、上海港など中国大陸との中間地点に位置していることから、海上通路上の重要な貿易港・寄港地として日本とは深い関係を持っていた。

日本政府は1889年頃から木浦港の開港を要請したことがある。韓国政府は1897年に木浦港の開港に踏み切った。釜山、仁川、元山に次ぐ朝鮮半島四番目（鎮南浦と同時）の開港である。日・米・露・仏・英・独の列強に一斉に開港した。

特に日本は木浦港に強い関心を持っていた。開港が正式に決定される前から領事館設置の準備に取り組み、開港と同時に領事館の執務を開始した。英国とロシアも敷地を獲得し領事館設置を検討したが、設置には至らなかった。日本領事館は開港と共に設置された。

開港当時の木浦は人口約500名の小さな漁村であった。開港による新しい潮流に乗ってビジネスチャンスをつかもうと各地から商人たちが集まってきた。日本からの移

住者も年々増加した。開港当時、45世帯、206名の日本人が居住していた。若松領事が着任した時は266世帯、1,045名であった。日韓併合の時は3,494名、それが1939年には8,587名に増加した。開港初期は日本人中心の港作りであった。港の役割の拡大によって商人や労働者が各地から集まり、貿易をはじめとする産業の活性化によって近代都市として発展した。戦前の木浦は朝鮮半島6大都市の一つであった。

1902年7月、若松は第三代目の木浦領事として着任した。気候温暖で自然環境に恵まれている木浦地方に安堵した。各方面に就任挨拶を済ませると、産業実情の調査に着手した。

陸地棉の栽培地を探す

若松兎三郎は、清国沙市領事から、韓国木浦領事への転勤を命ぜられ、沙市出発の時、農事調査のため巡回中であった農商務省農務局長酒匂常明と遭遇した。運命的な出会いであった。酒匂局長は中国巡回を終えて、韓国行きの船舶に乗船した。同じ船舶に乗り合わせた二人は揚子江を航海しながら、棉花に関する話題で長時間を費やした。長旅を感じさせないほど棉花の話に花が咲いた。二人の対話から朝鮮半島における衣服文化を変えさせる契機が生まれたのだ。

日本の棉花生産は農家の自家用途にすぎなかった。国民生活状態が向上し、外国貿易の発展によって棉製品の需要が増加した。紡績業界は機械紡績用の原料として大量の原棉を必要としたが、在来棉は繊維が短く紡績原料には適さなかった。したがって、中国、米国、インドなどからの輸入に頼っていた。世界で圧倒的に生産量が多い棉花はアップランド棉という陸地棉であった。南米が原産地であるが、米国で品種改良された棉種で世界棉花の約90%のシェアを持っていた。

陸地棉は繊維が細く長く、強くねばりがあり、光沢のある、伸張性に富む棉花として紡績業界では評価が高かった。日本政府は1874年に米国から陸地棉の種子を輸入して東京の内藤新宿試験場において試作させた。日本最初の試作である。引き続き各地で試作したが、十分な成績を挙げる事ができなかった。

陸地棉の成長期の9月下旬以降、日本列島は雨量が多い。陸地棉は青い実(コットン・ボール)が空を向けて開く習性があり、雨水がボールの中に溜まり腐敗する。これが不成功の主要な要因であった。

国内栽培が不可能であり、大量の原棉を輸入に依存している現状に鑑み、帝国内で栽培可能な地域を探すことが酒匂局長の任務であった。

若松の勤務地の沙市地方は中国有数の棉花産地である。若松は領事任中、中国の政治、経済、産業、文化などの実情を調査した。主要産業である棉花に関しても調査し研究したため、棉花については精通していた。船中で酒匂局長から棉花の国内事情を聞いた時、若松はアイデアが浮かんだ。

「局長！朝鮮半島南部の木浦地方は地理的に中国の沙市地方に類似しています。それに気候が合致すれば最適ではありませんか。木浦地方に賭けてみましょう」と期待を込めて木浦での再会を約束した。

朝鮮半島では1360年代から棉花栽培が始まった。中国から導入したアジア棉、または在来棉と呼ばれる棉種である。朝鮮半島の風土は棉花栽培に適していた。原始的な手法ではあったが、全土に普及し生成された。当時、日本は朝鮮から大量の棉布を輸入していたが、1592年の文禄・慶長の役（壬辰倭乱）の発生によって、朝鮮から棉布が供給されなくなった。その対策として日本国内で棉作棉業が始まった。これが徳川時代における棉業興隆の出発点である。

木浦地方は古くから在来棉というアジア棉を栽培し、日本にも輸出するほど棉作が栄えていた。棉花栽培が既に行われていた。若松は木浦地方が地理的にも風土および気候においても沙市地方と類似していることに心強さを感じた。ますます興味が湧き、酒匂常明農務局長の木浦到着を心待ちしていた。酒匂局長が到着すると、木浦対岸の高下島という小さい島に案内した。当地における棉作状況を視察した酒匂局長は「これはいける」と感激し、「やってみる価値がある」とゴーサインを出した。

陸地棉試作地を平和と共生の象徴に

若松兎三郎領事は木浦地方の風土および気候が米国種陸地棉栽培に好適であるという酒匂農務局長の判断に心強さを感じた。胸が躍るほどの感激であった。日本で栽培できない陸地棉を韓国で栽培できれば、韓国の棉作改良によって産業の発展に役立つと共に、輸入に依存していた日本の紡績業界への原棉供給が可能である。日韓両国が共に利益を得られる一挙両得の策となる。外交官としてやりがいのある仕事であった。

若松領事は韓国南部地方における陸地棉の栽培の可能性について外務省に具申すると共に、民間有志に対しても棉作の必要性を説いた。しかし、外務省は元より若松の意見に賛同する人は表れなかった。それでも若松は諦めず辛抱強く緻密な作戦を練って、一歩ずつ進めた。陸地棉栽培のカギは気象条件である。木浦地方の気象関係を丹念に調査した。外務省に報告した1903年の1年間の天候記録は、「晴264日、雲60日、雨36日、雪6日」。

陸地棉の播種から収穫までの期間(5月～10月)の木浦地方の正午の平均気温は21.7度と比較的に高温である。特に、棉花の成長期の7月27.8度、8月30.6度、9月29.4度と高く最適である。さらに6月と7月は雨の日が多く、9月下旬以降は雨量が少ないことも好都合であった。陸地棉栽培に理想的な気候であることが確認された。

1904年春、農商務省技師加藤末郎が視察のため木浦に到着した。若松は同地方における陸地棉栽培の可能性を説明し、個人として試験栽培したいと協力を要請した。加藤技師の斡旋で、農商務省農事試験場畿内支場より米国種、その他の棉種子10数種の交付を受け、木浦・高下島に試作した。これが朝鮮半島における陸地棉栽培の始まりである。

高下島は豊臣秀吉の朝鮮侵攻の時、日本水軍を撃破して制海権を握った名将として知られる李舜臣將軍が艦隊を整備するために108日間駐屯した戦略地である。当地には李舜臣の遺跡「李忠武公記念碑」が建てられている。木浦開港後、日露両国の角逐が始まり、高下島は戦略拠点として重要視された。ロシアが高下島の獲得を目指して

動き出すと、日本海軍が素早く高下島全土の所有権を入手した。それを日本領事館が管理していた。

このような因縁の地である高下島に陸地棉試作地とすることで「平和」と「共生」の象徴の島にしようと若松は考えた。高下島には20数戸の韓国人部落があり、島民は従来棉花を栽培していた。日本人に委託し現地農民に試作させた。その日本人は棉花栽培の経験はなく、選定された試作地は耕地として適切な土地ではなかった。専門家から見れば試作上問題はあったが、大体の成績は頗る良好であった。この地域の風土が陸地棉栽培に適していることが確認された。

農商務省は月田藤三郎技師を韓国の棉作状況調査のために派遣した。木浦に到着した月田技師は9月2日、高下島の試作地を視察し、次のように報告した。

「試作地の土質は花崗岩の風化により砂質壤土で表土が甚だ浅く、荒蕪地を試作のため調整した場所なので試作地としては好適とはいえない。試作者は棉作上の経験がなく、試作上問題がある。殊に播種量がすくないため収穫量の調査に支障がある。試作方法が完全ではないため、結果を推測することは困難だが、試作植物の状態及び採取した棉花の品質等から察して、従来本邦で苦心した同棉花の試作品とは比較にならない。韓国の風土は陸地棉栽培上頗る望みがある。この種棉花は将来大いに拡張する見込みあり、広い地域に試作する必要がある。米国種陸地棉は輸入棉花の中心であり、それを韓国で得られるのであれば、綿糸紡績業の経営に極めて有利である。故に、この種の棉に関する研究及び栽培の奨励を講ずることが急務である」

陸地棉試作成功で東京を動かす

棉花試作の収穫を終えて、若松領事は木浦・高下島の陸地棉試作結果が良好であることを確認し、1904年11月24日付で小村寿太郎外務大臣宛「米国種棉花試作報告」を送付した。

「当地方に於いて棉花の成熟期の9、10、11月の各月は例年雨量至って少なく、米国種棉花或いは風土に適するかも知れずと、かつて専門家より聞き及んでいたが、未だ試験場の設備なく、当否を知る機会がなかった。本年農事試験場畿内支場より米国種十三種を受け、当港対岸の高下島に於いて不完全ながら本邦人に命じ韓国農民を使役し試作した。概要は左の通り。

試作地は北向き傾斜の畑地で、肥料として干鰯のくずに人糞を混合したものを一回施し、5月25日播種。棉木の高さ最大3尺5寸位(約106cm)に成長、8月10日に開花し初め、朔が10ないし20個。平均は13、4個。10月10日朔開き初め、同日より収穫し11月20日見本三種抜取の際に、尚朔の開かざるもの半開きで全開せざるもの凡そ2割あり。

参考として安南(ベトナム)種、日本種、朝鮮種を併せて試作したが、安南種と日本種は種子の到着が後れ、6月10日播種した。安南種は大部分発芽せず、日本種は発育かなり良好で、8月初開花をはじめ、9月8日収穫を始めているが、今なお収穫中。朝鮮種は米国種と同時に播種したが、普通韓国人が作るものに比し、発育が非常に良

好で着花の多いものは一本につき20個ある。肥料を施したせい、他の試作棉同様多数の虫がついた。普通の朝鮮棉は虫が生ずることは極めて少ないという。試作朝鮮棉はほぼ収穫終了せり」。

追伸として米国種棉木13種、収穫棉の見本15種を別送する。到着次第農商務省への転送を申し添えた。

若松領事からの「米国種棉花試作報告」を受け取った外務省は、石井通商局長名で酒匂農商務省農務局長宛に「米国種棉花試作状況通知の件」を採取した見本および写真と共に12月9日付で転送した。

以上のように、若松領事が各方面の協力を得ながら、個人として始めた木浦高下島における米国種陸地棉試作の成果に関する報告が政府部内における政策決定のための重要な判断材料となった。

一方、若松領事は試作棉の繰棉成績を知るために、棉茎および実棉の標本を写真と共に農事試験場畿内支場に送付し、鑑定を依頼した。

依頼を受けた畿内支場は見本が少ないため正確な鑑定は困難であるとしながらも、提供された標本を詳細に分析し、「韓国木浦に於ける陸地棉の栽培結果は宜しく、害虫を予防すれば、棉作の将来は決して望みなきに非ざるなり」と、コメントを寄せた。

これとは別に、若松領事は実棉見本を大阪の内外棉株式会社に送り、繰棉歩合の検査を依頼した。内外棉株式会社は検査結果を作成して、以下のように回答した。

「米国種実棉の繰棉歩合は、三分以上に達するもの甚だ稀にして、概ねそれ以内になるにも拘らず、木浦に於ける試作棉が米国以上の結果を現わしたのは、全く地質に適したもので、前途大いに望みあると思惟する。試作の歩止まりのみを以て、直ちに一般農家が栽培する平均収穫の標準とは言えないが、結果は極めて良好なりと認める」

試作は無駄ではなかった。木浦駐在領事若松兎三郎からの米国種陸地棉試作の成果についての報告が東京に伝わると、農商務省はじめ関係官庁や紡績業界はもちろん、政界の有力者の間でも歓迎の声が上がった。殊に農商務省は数次にわたり、技師を木浦地方に派遣し現地調査を始めた。若松領事の棉花栽培への執念が実り、関係官庁や関係者に認められるようになった。

韓国陸地棉の元祖となる

若松兎三郎は日本と韓国の共通の利益になる事業として世界の主要棉種である陸地棉を気候条件の良い韓国南部地方で栽培して産業化しようとした。木浦・高下島における陸地棉試作がその始まりであり、試作の成功によって朝鮮半島全地域に普及される契機を作った。若松は韓国における陸地棉栽培の元祖であり、また衣服文化を変えさせた先駆者である。

陸地棉試作地の高下島には、「朝鮮陸地棉發祥之地」の記念碑がある。棉花奨励三十年記念会が1936年に建立したもので、その裏面には、「明治三十七年木浦駐在大日本帝国領事若松兎三郎氏此地ニ初メテ陸地棉ヲ耕作ス」と刻まれている。この記念碑は終戦後しばらく放置されていたが、2008年に文化遺産としての価値を認め、当時の丁

鍾得木浦市長が保存を決定し、2013年には記念碑周辺に棉花畑が造成され、陸地棉試作から109年ぶりに高下島の発祥地で棉の花が再び咲くようになった。これに併せて、木浦市は高下島の陸地棉発祥記念碑および棉花畑を観光コースとして指定した。

若松領事からの陸地棉試作の成功の知らせが東京に届くと、紡績原料の生産地探しに苦勞していた日本の朝野にとって喜ばしいニュースとして歓迎した。

原敬など政界有志動く

1905年3月、原敬（後に総理大臣）、大石正巳、野田卯太郎、萩野芳蔵など政界の有力者が協議し、ヨーロッパ諸国の例に倣って、棉花栽培協会の設立を申し合わせた。まず専門家による完全な試作を実施する必要があるという認識に一致した。大日本紡績連合会と連絡を取り、また農商務省商工局長森田茂吉も合流して官民合同で取り組むこととなった。

4月12日、東京ホテルにおいて官民合同協議会が開かれた。各界を代表する有志が参集した。錚々たる顔ぶれであった。主な出席者は次の通りである。

政友会：原敬、大岡育造、杉田定一、栗原亮一、森本駿、奥野市次郎、野田卯太郎、萩野芳蔵、改野耕造

進歩党：鳩山和夫、大石正巳、守屋此助、加藤政之助、青地雄太郎、江藤新作、波多野傳三郎、角田眞平

農商務省：酒匂常明農務局長、森田茂吉商工局長、月田藤三郎技師

紡績連合会：庄司乙吉紡績連合書記長

農商務省の酒匂農務局長、森田商工局長、月田技師が韓国の棉花栽培事情、特に木浦・高下島における陸地棉試作の結果について報告した。棉花栽培協会設立の準備に取り掛かることにし、協会設立の趣旨、方法、手順などについて協議した。棉花栽培の将来性を考えて広く一般の賛助を求めることとした。棉花栽培協会を組織して韓国における陸地棉の繁殖を図り、日本の棉業の原料を補充することが目的であった。まず気候・風土が陸地棉栽培に適している全羅南道地方において直ちに完全なる試作を実施することを決議した。

若松領事の陸地棉試作の結果が良好であり、将来有望であるという判断を踏まえて、専門家による的確な試作をより広い範囲で行う必要があった。播種時期の関係上、協会の設立を待たずに、発起人会の協議により、1905年度に再試作を行なうこととした。

その決議を受け、農商務省と交渉した結果、農事試験場技師安藤廣太郎が派遣された。安藤技師は5月に渡韓し、他の用件で渡韓していた杉田定一、奥野市次郎、萩野芳蔵の三人と共に、試作地の選定に当たった。

安藤技師は当初、木浦、自防浦（務安）、栄山浦、羅州、光州、郡山の6か所を試作地として選定した。安藤技師は棉作に経験のある農民一人を日本から連れていた。農学士加藤末郎の監督の下で再試作の作業が始まった。